

平成 26 年度

大学生の力を活用した集落復興支援事業実態調査

福島県塙町真名畑集落



東北大学地域密着 Lab

平成 27 年 3 月 19 日

目次

I. はじめに.....	3
II. 地域概要.....	4
1. 埴町概要.....	4
2. 真名畑区概要.....	4
III. 調査報告.....	8
1. <<ヒト>>.....	8
2. <<土地>>.....	10
3. <<生活>>.....	13
IV. 地域の魅力.....	19
1. 自然.....	19
2. 歴史・文化.....	21
3. 生活・食.....	23
V. 集落活性化活動案の提案.....	26
VI. おわりに.....	29

I. はじめに

我々「東北大学地域密着 Lab」は、東北大学理学部地理学教室に在籍し、主に人文地理学を専攻している大学院生 3 名が中心となって活動を進めているグループである。本事業年度は、「福島県塙町真名畑(まなはた)区」において、今後の活性化に向けての方針を検討していくことを目的として集落实態調査を行った。調査方法としては、統計情報の集計、アンケート調査、聞き取り調査、資源散策を行った。本報告書では、これらの調査結果をまとめたものである。

地域密着 Lab としては、人員不足のため、来年度からサークルとして立ち上げ、地理学のみならず様々な学部生を募り、より多くの視点から地域活性化に向けての意見や考えを共有できるような体制を整えたいと考えている。

調査スケジュール

活動日程	活動内容	
9/4(土)	<ul style="list-style-type: none">・集落の方との顔合わせ・集落内散策・親睦会(現状に対する考えのヒアリング・意見交換)	
11/8(土)、9(日)	<ul style="list-style-type: none">・3つのグループに分かれて魅力発見<ul style="list-style-type: none">①山林散策(自然・歴史)②集落行事「むじなっばたき」体験③ヒアリング調査・集落内の食文化調査・アンケート調査	
2/12(木)、13(金)	<ul style="list-style-type: none">・意見交換～活性化にむけて～・農地視察	

Ⅱ. 地域概要

1. 埴町概要

福島県東白川郡埴町は福島県の南東部に位置し、棚倉町、鮫川村、矢祭町(以上福島県)、高萩市、北茨城市、常陸太田市(以上茨城県)と接している。西は八溝山系、東は阿武隈高地に挟まれ、八溝山に源を発する久慈川が町中心部を南北に貫流しており、町域面積は 211.6 km²、その林野面積率は約 8 割となっている¹。

町内では久慈川に並行する形で JR 水郡線、国道 118 号線が走っており、棚倉町や茨城県方面へのアクセスが良好である。そのほか町内には国道 289 号線や国道 349 号線も走っており、鮫川村、いわき市方面へもアクセス可能である。

市街地には、交流拠点として町立図書館やコミュニティプラザを併設した磐城埴駅や埴厚生病院、道の駅はなわが立地し、磐城埴駅周辺に商業施設、病院、公共施設が集積している²。山つつじとダリアが町の花に指定され、特にダリアは地域全体で栽培に取り組んでおり、秋にはダリア祭りも開かれる。また、埴町は歴史のある町でもあり、江戸時代には幕府の直轄領である天領で、埴代官所が置かれていた³。

2010 年国勢調査によると埴町全体の人口は 9,884 人であり、14 歳未満の年少人口は 1,246 人(全人口の 12.6%)、15 歳以上 64 歳以下の生産年齢人口は 5,551 人(同 56.2%)、65 歳以上の老年人口は 3,087 人(同、すなわち高齢化率は 31.2%)となっており、人口密度は 46.7 人/km²である。

2. 真名畑区概要

次に、今年度我々東北大学地域密着 Lab が活動してきた真名畑区について概観する。真名畑区は埴町の西部に位置し、八溝山系の麓に位置する集落である。高品質な奥久慈材の産出地でもあり、豊かな自然に囲まれた地域である。真名畑区は市街地や幹線道路が通り、久慈川の流れる平野部とは山一つ隔てられているものの、県道 196 号線のトンネル貫通以降は埴町中心部へのアクセスが大幅に向上している。また、真名畑区も古くからの歴史を有しており、かつては金の採掘される地として栄えたという。

区の面積は約 26 km²、人口は 237 人でそれぞれ町の 12.2%、2.4%を占める。人口密度は、9.1 人/km²程度となっている。さらに年齢構成についてみると、年少人口が 26 人(真名畑区人口の 11.0%)、生産年齢人口が 125 人(同 52.7%)、老年人口が 86 人(36.3%)である(図 1)。図 1 をみると、20 代から 40 代前半の人口が少なく、40 代後半から 64 歳までの人口が多くなっていることが分かる。今後、後者が高齢人口に移行する際には急激な高齢化率の上昇が見込まれる。一方、2000 年国勢調査での真名畑区の人口をみると、総人口が 292 人、階級

¹ 農林業センサス 2010 による。

² 埴町地域公共交通総合連携計画より一部修正。

³ 現在設置されている道の駅の名称も「天領の郷」である。

別内訳をみると年少人口 53 人(同 18.2%)、生産年齢人口 147 人(同 50.3%)、高齢人口 92 人(同 31.5%)となっている。これと比較すると、2010 年では高齢化率の増加や年少人口・生産年齢人口の減少が顕著である。さらに、集落内の戸数でみると 1970 年には 87 戸であったものが、2014 年には 65 戸にまで減少している(図 2)。また、2010 年現在の産業分類ごとの従事者についてみると、第一次産業が 23 人(20.9%)、第二次産業が 40 人(36.4%)、第三次産業が 47 人(42.7%)となっており、埴町全体と比較すると第一次産業従事者の割合が少し高い(図 3)。

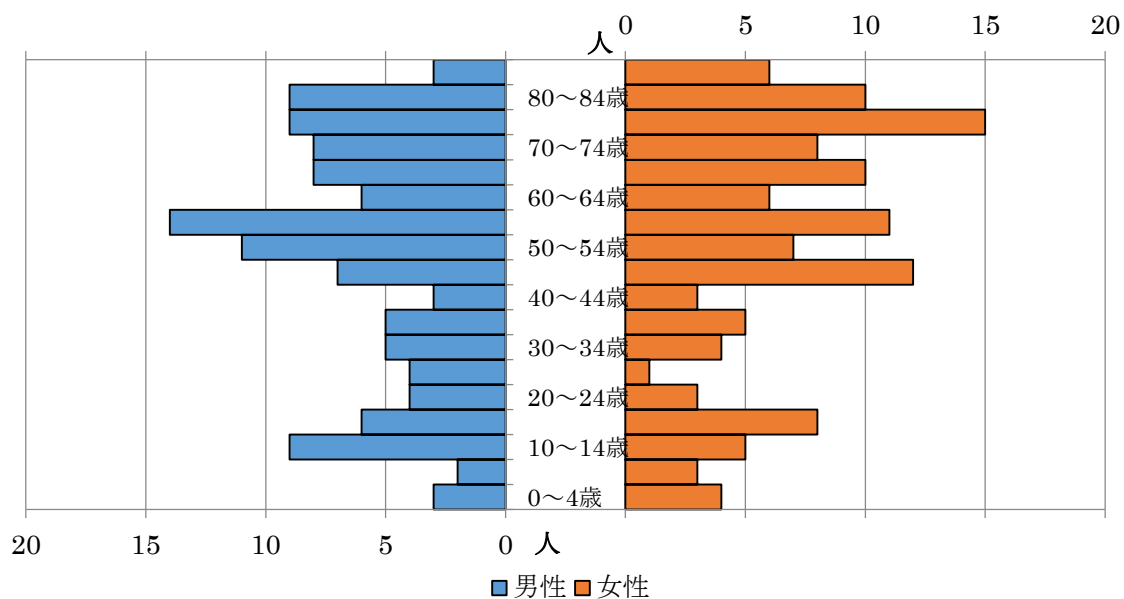


図 1.真名畑区の人口ピラミッド

出典：国勢調査(2010)

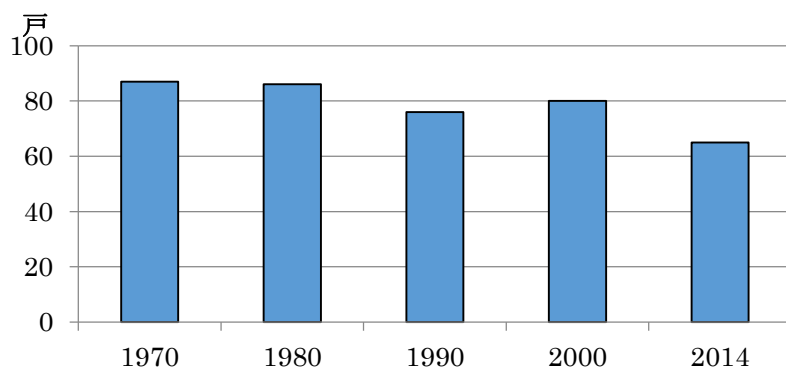


図 2.真名畑区の総戸数の変遷

出典：農業集落カード(1970-2000)および聞き取り(2014)

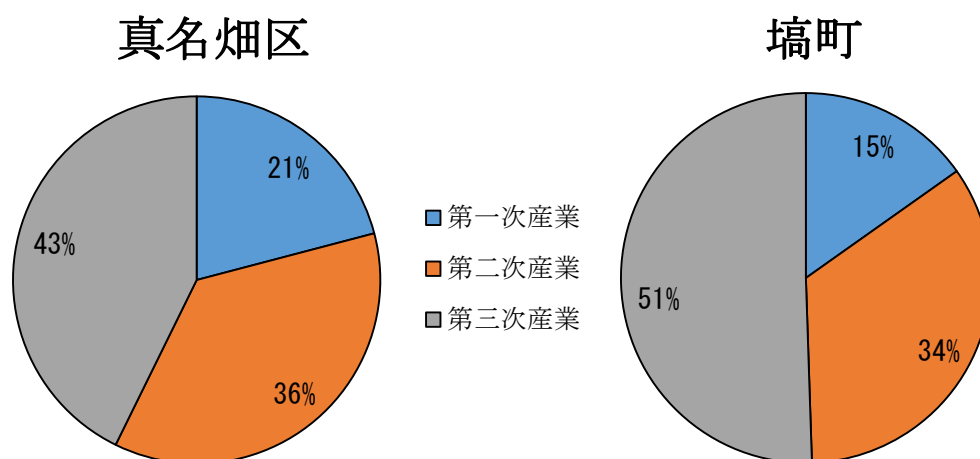


図 3.まなま畑区(左)及び基町(右)の就業構造
出典：国勢調査(2010)

次に、まなま畑区の農業について概観する。

まなま畑区は農業地域類型でいう山間農業地域、水田集落に分類されている。2010年現在、まなま畑地区における総販売農家数は27戸であり、自給的農家も含めると農家数は52戸を数える。販売農家のうち専業農家は4戸で、ほかの23戸は第2種兼業農家⁴となっている。

地区全体の耕地面積自体は39haであるが、経営耕地面積は15.3ha、1販売農家あたり経営耕地面積は0.57haとなる。経営耕地の用途については図4のとおりであり、田が全体の約6割であるほか不作付が1割程度を占めている。また、販売農家の耕作放棄地率は33.5%となっており、全国平均の10.6%の3倍以上にのぼる。

販売農家の中で、自営農業に従事した人数である農業従事者数は80人で、そのうち主として自営農業に従事した農業就業人口は37人となっており、前者に従事日数別、後者を年齢別にみたものがそれぞれ図5、表1である。このことからまなま畑区では農業従事者の高齢化が顕著にみられること、農業従事者の半数程度が他の仕事をしながら農業にも従事しているということが分かる。なお、後継者に関してみると、後継者ありと答えた販売農家は24戸のうち同居が17戸、他出が7戸となっている。

⁴ 農業所得を従とする兼業農家を指す。

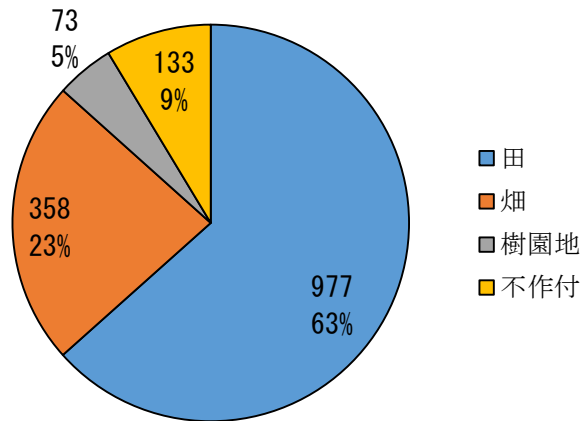


図 4.経営耕地の土地利用状況

出典：農業集落カード

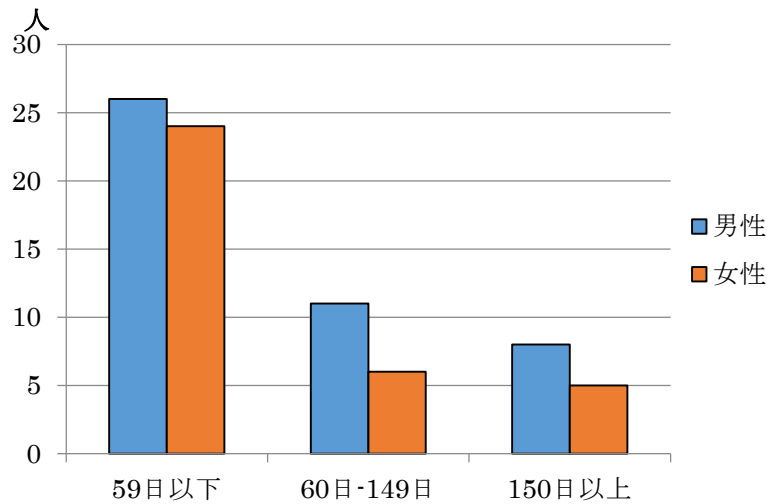


図 5.従事日数別農業従事者数

出典：農業集落カード

	15-29 歳	30-39 歳	40-59 歳	60-64 歳	65 歳以上	計
男性	0	0	0	0	18	18
女性	0	0	4	3	12	19
計	0	0	4	3	30	37

表 1.年齢階級別の農業就業人口 単位：人

出典：農業集落カード

Ⅲ. 調査報告

1. ≪ヒト≫

この章では、実施したアンケート調査の集計結果をもとに、農地の状況や日常生活、活性化に対する意向から集落の実態について把握することとする。アンケート調査の目的は、全ての家庭へのヒアリング調査は本年度では実施できなかったが、包括的に地域の情報を得ることに加え、集落活性化を行うにあたり、活動実施への合意形成を行うためには、各家庭・農家の構成や所有している資源状況、集落に対する考え方を集計することが重要であると考えられるためである。

アンケートは集落代表の方にまとめてアンケートを送付し、集落内に配布して頂いた(回収数/配布数=39/60；回収率 65.0%)。ここで示すアンケート結果は、回収率が 65%であり、集落全体の状況を把握できているデータではないということと、また回答者の属性が世帯主の男性に偏っており、考え方などにも偏りが生じていることに留意する必要があると考えられる。

回答者の属性については、回収数 39 に対して男性 34 名、女性 1 名、未記入 4 名であった。年代と職業別に見た回答数は表 2、年代別世帯人数比⁵⁾は図 6 の通りである⁶⁾。

(人)	会社員	公務員	自営業	農業	林業	無職	不明	計
30代					1			1
40代	3							3
50代	11	2		3				16
60代	9	2	1	3		1		16
70代				5		2		7
80代				1		1		2
不明	1						1	2
計	24	4	1	12	1	4	1	47

表 2.年代・職業別回答数

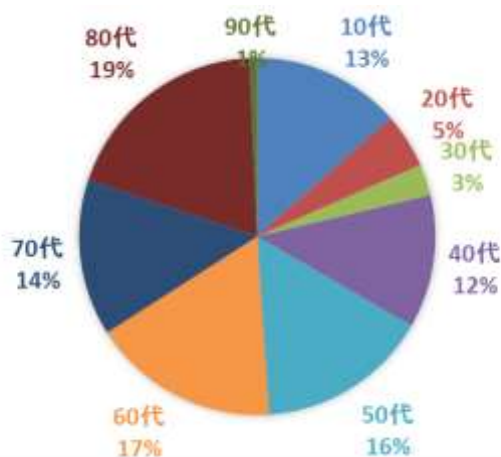


図 6.年齢別人口構成比

⁵⁾ アンケート内の、世帯構成を集計した結果である。

⁶⁾ 兼業を別々で集計しているため、必ずしも総数と回答数は一致しない。

回答者の特徴としては、男性の就業者がほとんどであること、また50・60代の回答が多いことが分かる。また、人口比としては、80代が最も多く、次いで60代、50代、70代となつてはいるが、40代からはバランスよく年代別に構成されており、今後10年程度は高齢化による集落の維持困難性は考えにくいと思われるが、その後の急激な高齢化が危ぶまれる。しかし、やはり若年層に関しては、より良い就業環境を求めて、他出しており帰省はしていても、今後集落に戻ってくるかどうかは把握できず、現段階の調査結果では、帰村意欲については言及し難い。これらのことから、この集落を今後支えていくのは50～60代であると考えられる。特に、60代の方は、退職したばかりの方も多く、集落での生きがいを見つけるために、集落活性化への意欲が高まっている。回答者の就業状況については、会社員の方が最も多く、次いで農業となっている。農業については、専業ではなく、兼業の方と退職した方が農業を行っているという二つのケースに分けられる。通勤圏は主に埴町内や棚倉町、矢祭町となっている。40代から上の年代での人口構成比のバランスが取れているということを前述したが、60代の方からのヒアリングの中では、「私たちが小学生の時には、地域に教育熱心な方がいて、寺子屋のような形式で集落の子供を集め、勉強を教えてくれた。そして、町の外に働きに出て行っても、最終的には集落に戻って生活するのだということ言われたものだった」というお話があった。実際に、集落の方に集まっていたいて話をしている際にも、20・30代の頃には、町外や県外に働きに出ていたが、その後は集落に戻って埴町周辺で現在は就業している、もしくは就業していたという方が多いようである⁷。実際に、現在の他出状況と帰省頻度を示したのが表3である。中山間地においては、若年層の都市部への流出が問題となっているが、真名畑区については、子供の集落周辺や県内の別地域⁸への転出者が最も多く、帰省頻度も高いことが分かる。次いで、千葉県や東京都といった関東地方中心部であり、隣県である栃木県への他出も多くなっている。他出先と帰省頻度の関係の特徴としては、①どの他出先であってもお盆や年末年始には帰省しているということ、②福島県内での転出者が多いが、帰省頻度は高いということの二つであると読み取ることができる。帰省頻度多い場合については、「家に用事がある」や「顔だし、顔みせ」というようなケースが多くなっている。また、年齢別でも集計を取ったが、相関はみられず、20代の方も50代の方もいた。このことから、集落居住者と県内他出家族の繋がり希薄ではないということが伺える。一年を通して集落で地域活性化に向けた活動を実施する場合、お盆や年末年始のみの帰省では活動への参加に協力してもらうのは難しいと考えられる一方で、帰省頻度が高い家族については、協力していただける可能性は高いと言える。

⁷ 具体的な人数については把握できていない。

⁸ 棚倉町や郡山市への他出者が多い。

		帰省頻度/年					総計
		0回	1～2回	3～5回	6～9回	10回以上	
他 出 先	青森県			1			1
	岩手県		1				1
	宮城県		2				2
	福島県	1	2	6	3	5	17
	茨城県			1	1		2
	栃木県		2	1	2		5
	埼玉県		1				1
	千葉県		1	2		2	5
	神奈川県	1	1				2
	東京都		3		1	1	5
	新潟県	不明					1
	愛知県		1				1
	福岡県		1				1
	総計	2	15	11	7	9	44

表 3.他出先と年間の帰省頻度

2. <<土地>>

近年、中山間地での様々な農業体験や地域の観光地の整備を進めるなどのツーリズムによる振興が盛んになっている。環境省 HP では、「地域ぐるみで自然環境や歴史文化など、地域固有の魅力を観光客に伝えることにより、その価値や大切さが理解され、保全につながっていくことを目指していく仕組みです。」と記載されている。このように、地域の魅力を伝えていくということにおいて、これまで地域の人々によって維持管理されてきた資源の活用が有効となることは誰もが持つ一般的な考え方である。しかし、中山間地資源における土地・資源利用に関する問題や今後活性化に向けての課題として、大きく二つの点が指摘される。一つ目は、高齢化や過疎化により、資源の利用が減退、もしくは利用そのものがされなくなっている現状があるということ。二つ目は、地域の人々は、農地にしても山林・裏山にしても、かつて利用してきた土地などの資源は生活の中の一部であり、地域の魅力として捉えていない、ましてや外部の人が観光地として訪れるような魅力や機能を持ったものではないといった考え方を持っているケースが多いということ。そこで、まずは、一つ目に指摘した点として、地域資源の利用の実態について明らかにして、集落の土地持続性について、議論することにする。

表 4 で示しているのは、アンケート調査によって集計した現在所有している土地について利用状況別面積を示したものである。水田については、販売用よりも自給用の方が大きくなっている。ただし、休耕水田面積が 44% と、かなり大きな割合を占めていることも分かった。図 7 によると⁹、水田を現在は全く利用していない農家で休耕田が多く発生している現状である。詳細な地域内での位置関係は把握し切れていないが、農家 1 件の休耕水田面積が大きいことから、休耕地はある箇所にまとまっているということも考えられる。同

⁹横軸に利用水田面積、縦軸に休耕水田面積をプロットしている。

時に、休耕地箇所周辺の里地景観が失われているということを同時に示唆している。一方で、現在も水田を利用している農家では休耕水田面積の全体での割合は小さくなっている。また、アンケート調査を詳細にみると、休耕水田面積の多かった(50a以上)農家では、回答者全員が会社員ということが明らかとなった。このような農家では、退職した後、水田を利用する可能性があるかどうかをヒアリング調査等で把握し、地域全体での水田利用を計画的に進めていくことも重要であると考えられる。

	水田 (a)	畑 (a)	山林
販売用	296 (26%)	22 (5%)	
自給用	352 (30%)	211 (50%)	
休耕地	509 (44%)	186 (44%)	
総計	11.6ha	4.2ha	300ha
主な 利用用途 栽培品目		大根、白菜、豆、 里芋、ねぎ、 なす、じゃがいも、 柚子 等	柿の木、椎木、 山菜採り、薪調達 (植林地も多い)

表 4.集落内の農地の利用状況

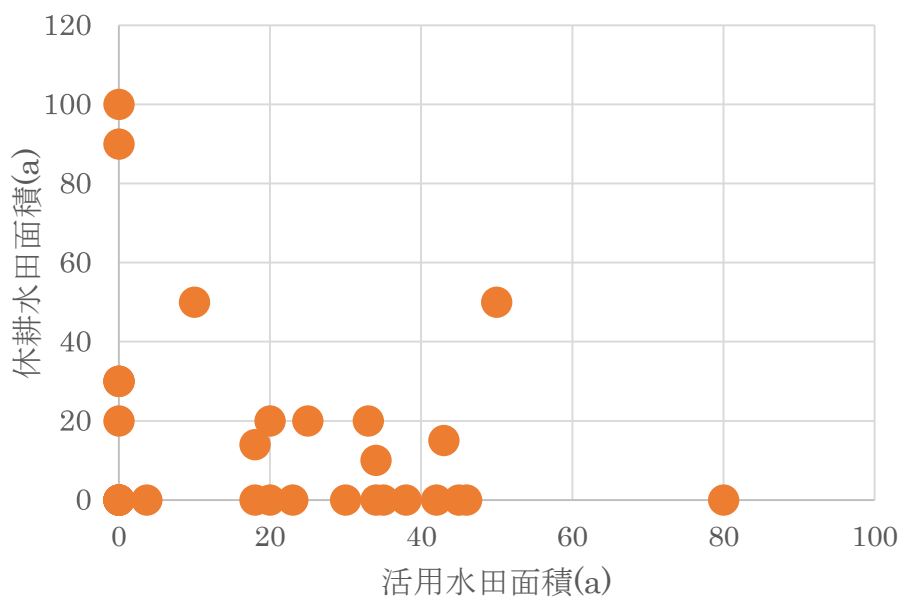


図 7.活用水田面積と休耕水田面積の相関

畑についても休耕地の割合は水田と同程度の 44%となっており、利用されにくい状況にあると言える。そのほかの特徴としては、販売用で畑を活用している農家は少なく、ほとんどの農家が自給的な作物の栽培を行っているということになる。真名畑集落は、古くから国有林事業による木材・薪炭材の産出や薪の生成が行われ、林業を主産業として生計を立ててきた農家が多かったという歴史的経緯が影響しているものと考えられる。80歳女性の方へのヒアリング調査の中でも、「夫は山に林業で何日も出稼ぎに行っており、山からトラックで降りてきた木材で薪を作る作業をしていました。」とのことで、女性も積極的に林業にかかわっていたことが伺える。具体的に挙げられていた栽培品目は以下の通りである¹⁰。「まこもだけ」とは、イネ科マコモ属の多年生草であり、水辺で群生するものであり、一部の農家では、休耕水田解消に向けて県から推奨されたとして現在栽培を行っている。しかし、稲作よりも手入れに係る労力が大きく、一部は農協に販売委託することもあるが、

白菜	大根	里芋	じゃがいも	ねぎ	なす	たまねぎ	きゅうり	豆類
らっきょう	ブロッコリー	レタス	こんにゃく芋	マコモダケ				

単価が低く生産性は低いとのこと。販売用としては、埴町全体で盛んに栽培がおこなわれているダリアやしゃくやくの販売栽培が2件の農家で行われていた。

水田・畑両方について休耕期間について集計した結果、ここ1~3年の間で休耕している農家は3件ほどであるのに対して、10年以上も利用していないと回答した農家は、水田で7件、畑で11件あった。こういった土地では、維持管理がされておらず、雑草等の繁茂が進行し、現在手が付けられないような状態になっていることが予想される。また、稲作を行う農家からは、獣害が特にひどいという意見が聞かれた。収穫時期の11月上旬に行った調査でも、水田の中で荒らされた跡が観察され、獣害対策のための電線張りも苦労が大きいとのこと。現在集落に猟師は残っていないことや、イノシシを狩っても殺処分するしか手段がないことが重なり、集落内のイノシシが増頭し、獣害被害が増加している¹¹。



獣害被害の様子とその対策

¹⁰ ヒアリング調査で得た情報も含まれている

¹¹ 近年の傾向から、イノシシによる獣害は里地里山の景観衰退の象徴と考えられている。

山林の利用については、個々の農家で多くの利用形態がとられている。裏山で柚子やブドウ、柿の木を植えており、自家用として収穫し、普段の食生活の中で干し柿やジュース、おかずの添え物として食生活の中で様々利用されていた¹²。山林では、震災前は山菜採りやきのこ狩りをしていた農家も多かったとの声が聞かれたが、震災後の放射線量の規制により、ほとんど裏山を活用できなくなったという。農家によっては、戦後の植林ブームの中で、後世に財産を残すためにスギの植林を行った農家がある一方で、広葉樹林がそのまま残る山もあり、針葉樹と広葉樹が混交する美しい里山景観が観られる地域となっている。

3. <<生活>>

我々は、外での活動頻度が高ければ、活性化に向けての活動にも参加して頂ける可能性が高いとして、日常生活の中で外出を伴うような日常行動についてアンケート項目を作成した。農家数の頻度別割合は図8の通りとなった。最初に述べたように、回答者が就業中の世帯主に偏っているため、高齢者や女性の生活行動は包括的に把握することはできていないと考えられる。しかし、農作業については、現在も農業以外で生計を立てている方々がいるにも係わらず、7割近くが農地を利用していることが分かる。地域内の利用・休耕地面積との関係を見ると、面積の割に農地で作業する農家の割合が多いことから、1件

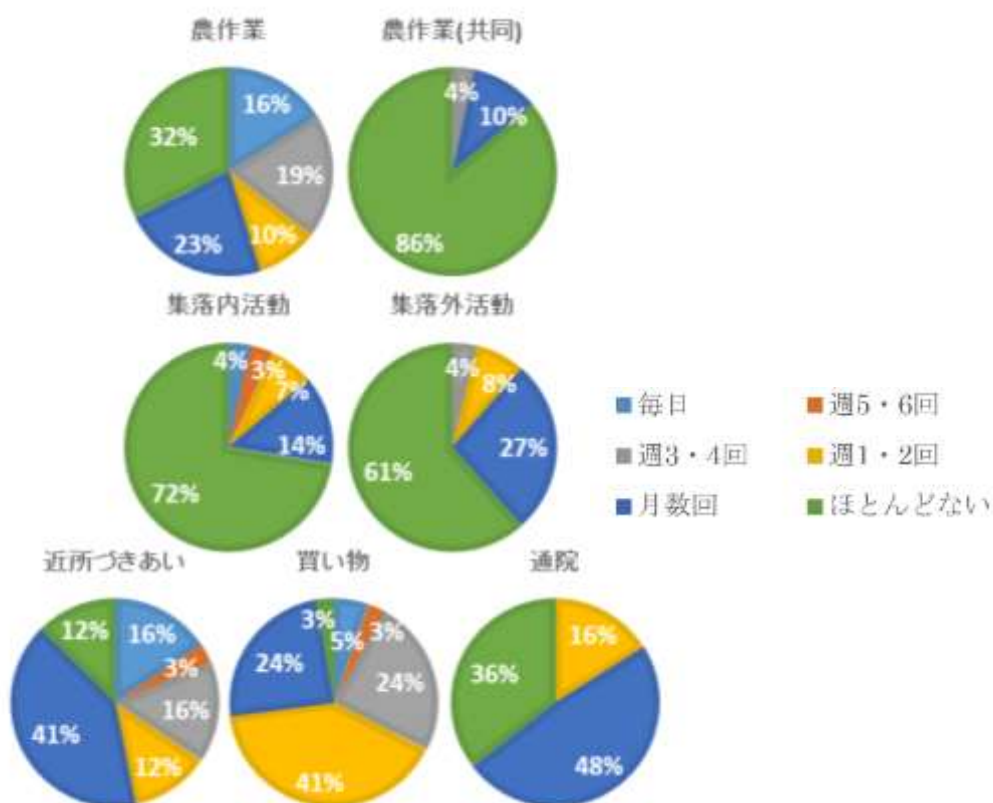


図8.生活行動頻度別農家(回答者)割合

¹² 現地ヒアリング調査より

の農家が利用する面積は小規模であるが、農地を管理する力が地域にはあるということが言えると考えます。また、別の考え方としては、小規模であるがゆえに農地の維持管理が現在も行われているのであり、これ以上農家が管理する農地が大きくなると、管理が難しくなる可能性もあるため、農地の利用については慎重に考える必要があるようだ。就業している方が多いということもあり、集落内や集落外での活動をする方は少なくなっている。ヒアリング調査(30代男性会社員)では、「子供もいるので、土日は子供の世話で手一杯で、他のことに手を出す余裕が現在はない。」という内容であり、時間的な余裕がないために、地域活動への参加が難しくなっているということが確認できる。また、高齢者や女性の方の日常生活の情報を補うために行ったヒアリング調査では、地域住民が集まった活動が行われていた。高齢者の方は主に週末の「ゲートボール」、女性方は、「琴教室」や「いきいき体操」といった地域主体の活動を実施している。少しでも地域住民同士の繋がりが生まれるように企画されたものである。同じように、地域の方々と触れ合う機会として、定期的な活動が行われている一方で、日常生活の中での「近所づきあい」も、お茶のみといった一つの楽しみとして認識される一方で、お互いの体調確認や情報交換、おすそ分けといった地域を維持していくためのコミュニケーションの時間としてカギとなる。そのように考えると、高齢者が定期的な活動により地域内交流が行われており、就業者の方でも5割弱の方が定期活動以外の部分で週に数回、集落の方との面識を持っているという構造になっている。集落が一体となり活動を進めていくためには、その活動の内容や進め方、運営方針や役割分担など様々課題があり、全ての課題において合意形成というものが必要となる。その時に大切なのがヨコやタテの繋がりであり、「あのヒトがこの仕事をやってくれるのであれば、私はこの仕事をやってみよう」であるとか「高齢の方は大変だから、この役割は私が引き受ける」といった合意形成へのインセンティブにつながるため、このような地域内交流やネットワークを把握することは非常に重要視されるべきである。

4. ≪活性化への考え方≫

また、我々は

①集落の人々が、集落での生活に何を求めているのか

②集落の人々が、普段の生活で何を楽しみにしているか

を把握するアンケート項目も用意した。これは、少しでも集落の方々が考える「豊かさ」に沿って、集落活性化案を立案できないか、また、日常生活の中に取り入れている楽しみを活動に取り入れることで、精神的な負担を軽減できるような活性化案を考えていくことができるのではないかと考えたためである。内閣府が実施した「国民生活に関する世論調査」(平成17年)によると、「これからは心の豊かさ」が重要であると答えている人は50~60代の方が多いという結果が出ており、特に就業から身を引いた60代後半の方々は、今後心の充足というものが求められている。しかし、集落を維持していく上では、心の充足だけでは不可能であり、物的・経済的豊かさとのバランスも考慮する必要がある。

結果は図9の通りである。最も重要視された項目は、「健康」である。これは、就業者にしても高齢の方にしても、仕事や趣味をするための資本は体であり、体調がよくなければ

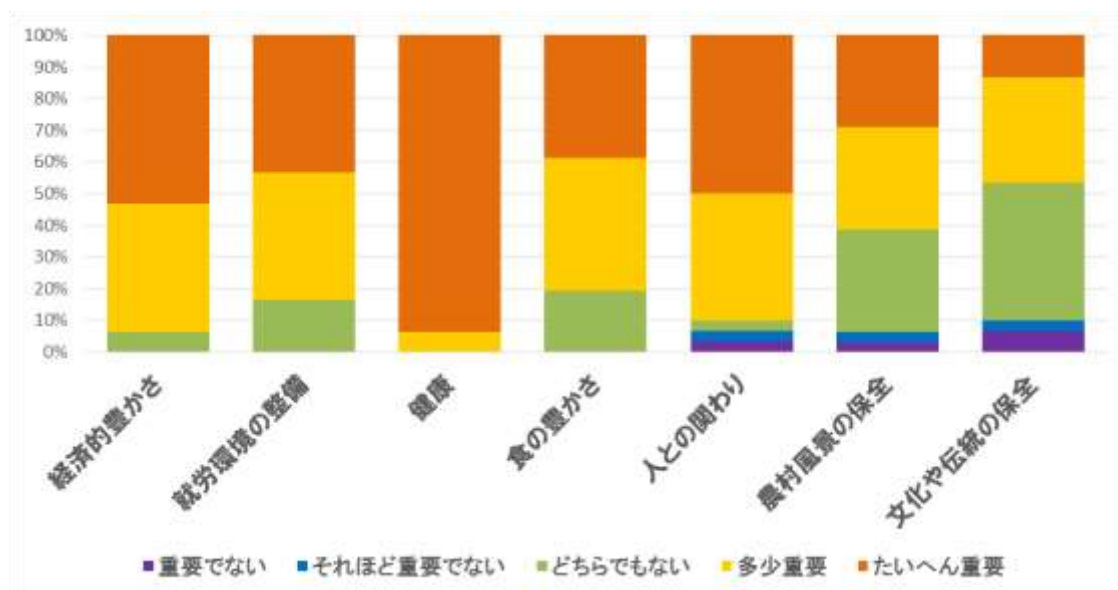


図9.集落(世帯主)が求める豊かさ

なにもできないという考えからくるものであると考えられる。次に多かったのは、「経済的豊かさ」と「人との関わり」が同程度の重要視された。「年金暮らしではやっていけない」といった声が多く聞かれ、また、通勤時に使う車のガソリン代も、奥山間部に位置する集落であるからこそ生じる問題であり、そういった面から「経済的豊かさ」を求める声が多くなっているのだろう。同じように、「就労環境の整備」に関しても、同じように集落と就業場所への地理的位置関係が要因となっている。現状からいえば、外国産木材の輸入や国産材価格の下落といった社会情勢の変化から、かつて盛んであった林業も、現在行っている農家はほとんどいない。主産業であった林業では生計が立てられなくなってしまった現在では、ほぼすべての方が職場を集落外としている。町と集落を結ぶ道路・トンネルが整備されたものの、15年前までは、曲折した道を利用するしか町にアクセスする方法はなく、非常にアクセス条件の悪い状況に置かれた集落であった。このことは、就業だけでなく教育の面、特に子供たちの送り迎えに大きな影響を与えていた。しかし現在は、通学用バスも通っており、送り迎えが無くとも通学が可能な状態になっている。

次に、集落内で求められている要素としては(図10)、最も多いのが「若者の増加」と「後継者の定住」である。次に多くなっているのは、「住民間の交流」や「地域外住民との交流」、「仕事」、「利便性」といった要素であった。

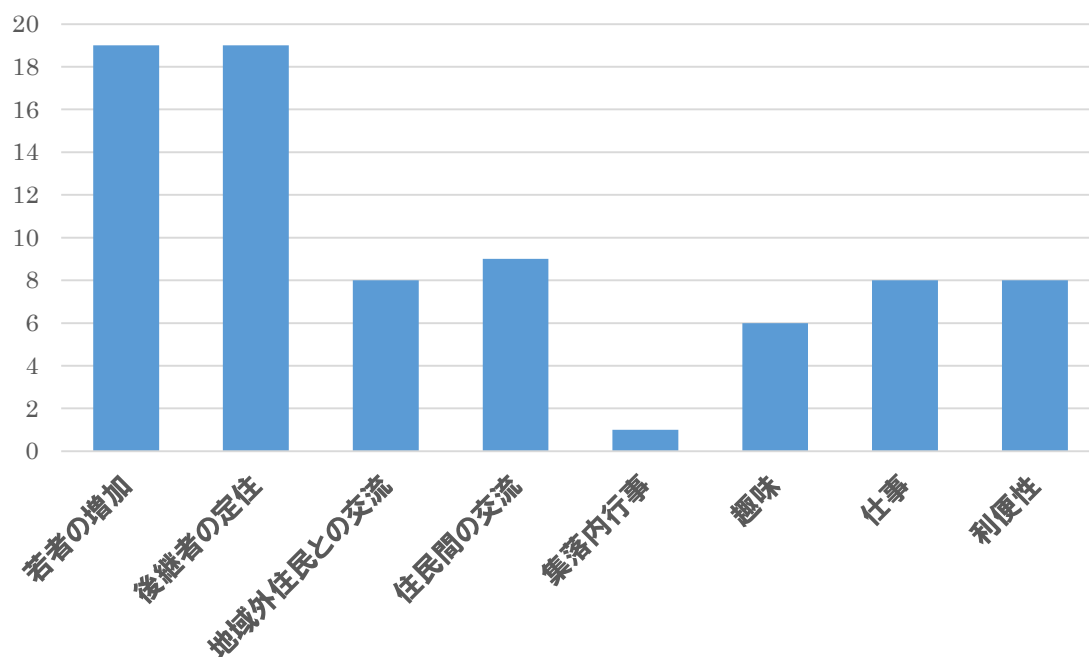


図 10.集落内で必要とされる要素

そして最も少なかったのが「集落内行事」である。このようにみると、将来も集落を維持するためには何が必要かという考えから、就業環境の整備や若者の増加といったことを重要視している方が多い状況にある。実際のところ集落内での農林業では生計を立てられないこと、子供がいる家庭については、土日も子供の世話で地域活性化に向けての活動への参加は大変だというような意見を持っている方もおり、アンケート実施の時点では、集落を元気にする活動の方向性が見えず何をしたらいいかもわからないという意見が多く聞かれた。さらに、具体的に挙げられた生活の中での問題点としては、次のような回答が見られた。

- ・高齢化による農作業の困難化
- ・物価の高騰による金銭面の問題
- ・通勤時間がかかること
- ・健康面に問題があること

ここまでのアンケート項目について検討する中で、以下のような考えに至った。

【真名畑集落の方々には、教育熱心であり、昔も今も非常に農業社会の現状を正確に捉えており、生活の中での問題点のみがアンケートの中ではっきりと浮き上がってきたものの、集落の方の前向きな意見が見えていない】ということである。

一方で、集落の人が趣味としているのは次のようなものであった。

農作業	庭木や花木の手入れ	温泉旅行	買い物	孫とのふれあい	釣り
ゲートボール	散歩	山菜採り	家庭菜園	魚釣り	登山
	自転車	読書	ゴルフ	野菜作り	犬の散歩

農作業や釣り、登山などに関しては、集落内にある資源を利用した活動にもつながり、活性化に向けて活用することが可能であると考えられる。ほかに挙げられた旅行や買い物、スキー等についても、普段から休日には活発に自分の楽しみを満喫していることが伺える。趣味には非常に積極的であり、活動の中に趣味を取り入れることは、一つ重要な考え方になると思われる。同時に、「真名畑区の魅力はなんであるか」を聞くアンケート項目も用意し、その結果は以下の表 5 の通りである。

モノ	ヒト
綺麗な清流がある	人が優しい
空気がおいしい	人柄の良さ
米がおいしい	まとまりがある
思いっきり田舎であること	教育熱心
下流側の溪谷がいい	外来者に対し、情味がある
清流と山里の田園風景	区民行事に協力的
雪が少ない→冬でもアクセス可	人間関係のまとまり
春の桜、秋の紅葉	自主性がある
金山跡地	

表 5.集落の方が考える集落の魅力

八溝山系の麓に位置する集落ということで、そこに流れる清流や、閉鎖的な山間部ならではの山、田、集落が集約された里山風景が魅力的であるということが集落内の方々の共通認識としての魅力であることが分かる。また、ヒトについては、昔集落内にあった「どんぐり会」¹³では、小学生や中学生が自主的にキャンプや卓球大会等を企画し、高校生や大学生のサポートを受けて活動を行っていたということもあり、現在 60 代の方々は、そのおかげで今も縦の繋がりが保たれており、積極性や自主性はこの会で培われてきたという。

そこで、2月に実施した意見交換会では、「活動に向けての問題点を話し合いの中で挙げないこと」と「自分が取り組んでみたいこと、挑戦してみたいことを数多く挙げる」「夢を語る」という条件のもとで、集まって頂いた集落の方¹⁴とディスカッションを行った。その結果、表 6 のような形で様々な意見が挙がった。

¹³ 現在でいう児童会のようなもの

¹⁴ 全員男性、30代～80代

グループ 1	グループ 2	グループ 3
人を集める(都会からも) 観光 子供の定住 食べる手段の確保 体験活動 飲む水で作る 直接消費者とつながる 災害はない 今あるものを使う 最終的な移住は大歓迎 米がおいしい・安心 田んぼを貸す 作業体験+集落での管理 娯楽 キャンプ場 散歩道 川・溪流の利用、自然釣堀 バーベキュー メディアの活用 農業体験動画の発信	民泊してもらおう イベント企画 〈魅力あるものに〉 収穫祭 芋煮会 杏の利用 集落での球技大会 「お母さんの味」を提供 一緒に作る 盆踊り復活 交流人口の増加 農地提供も みそ造り 酒米作り 利益追求よりも楽しさを 来てもらった人はリピーター になってもらうような仕 組みにする 時間のある 60 代以上が頑張 っている姿を見せる	そば作り 一番おいしい秋に収穫 集落外の人に来てもらう 作る+食べる+お酒 そばの実を挽く作業も まずは小さい面積で栽培 集落の畑・田んぼの特徴を 活かす 多湿な農地 水はけが良い農地 釣堀復活 集落内で様々なものを栽培 食べ歩きマップ 作業的には、今ある農機具 で対応できる方がよい イノシシ対策 →薬草(葉わさび、クレンソ ン、どくだみ等) コーヒー豆を作ってるから カフェでマスターがやりた い カフェで音楽演奏も

表 6.ディスカッションの中で挙げられた意見・考え

このように、実際にディスカッションを通して、集落の方々が、農作業では生計を立てられない難しい生活の中で、集落にある自然資源を活用した活動や、趣味や技術を活かした活動を実行してみたいという意思があり、一つでも多く集落の方の目標や夢を達成することが、集落の活性化につながるのではないかと考えている。また、どのグループにも共通して挙げられていたことが、

- ①食：特に真名畑の米の活用がしたい。
 - ②たくさんの人とつながりたい。
 - ③実現したい楽しみはたくさんある。
- ということである。

IV. 地域の魅力

地域資源調査の中では、大まかに【自然】、【歴史・文化】、【生活・食】というテーマに分かれて、ヒアリングや地域行事体験を通して集落实態調査を行った。そこで、この章ではそれぞれについてここで紹介することにする。

1. 自然

地域概要でも示したように、真名畑集落は八溝山系の麓に位置しているため、山林資源が豊富に存在する。この地域でも、戦後の木材需要に対応するために、スギ人工林への転換が行われた国有林地帯であることに加え、民家の裏山には広葉樹林も残されており、季節ごとに里山景観を楽しむことができる。特に、秋のスギ林と広葉樹林が織り成す風景は誰もが足を止めて眺めたくくなるような景色である。

現在、集落の方が山に入る目的は大きく二つであり、一つは山菜取り、もう一つは林業のためである。たけのこやキノコ類が豊富に採取可能であったが、震災後は放射線の影響により出荷停止の状況にあり、思うように裏山を利用できず、集落の方の楽しみが奪われているのが現状である。また、近年発生した落石により、栃木県と福島県を結ぶ林道が封鎖され、それ以前に行われていたラリー競技も現在は中止されている。ただし、少しでも早くラリー競技が復活することができれば、集落を訪れる観光客も増加すると思われる。それまでに、集落を訪れた際に足を休めてもらえるような受け入れ体制を整えることも一つの活性化案になるだろう。そのような即座に変えることのできない現状もあるが、ほかにも山林に関わる資源は豊富にある。例えば、木に傷を付けておくと、カブトムシやクワガタなどの昆虫が数多く取ることができ、ぽつんとたたずむ神社に歴史もあり、その周囲にはヤマザクラやヤマブキなどの木々が生育しており、誰もが興味を持つことができるような魅力が数多くあるのも事実である。他にも、山林の間を流れる美しい清流やススキ



綺麗に立ち並ぶスギ(左)と巨木(右)



ススキ群落(左)と秋の紅葉(右)

落があり、日本の里山を感じることができるような風景である。昔はキャンプをしたり、魚掴みをしたりと地域の子供たちの遊び場となっていたが、最近はそのような形で利用されるケースはほとんどない。もう一つ欠かせない資源は、「山を歩く図鑑」と呼ばれるような、山に関する植物や歴史建造物に関する知識が豊富な方がいるということである。資源調査の際には、その方に案内して頂いた。このように、地域の中にまだまだ眠っている知識や知恵は十分に活性化に生かせるものであり、どのように発信していくかを考えることも今後の課題となるだろう。

これまでに集落では、林道を活かした観光として

○季節ごとの山林観光 ○旅行者のための、植物の説明看板設置 ○ラリーの復活などが考えられたが、住民からは林道を観光化することによって、不特定多数の観光客入山による山林荒廃、産業廃棄物やごみの不法投棄等が生じる可能性があるのではないかと懸念していたとのことである。国有林であることや、利用できる道路が林道であることから一般の人々が観光に来るというスタイルの資源活用方法は難しいようである。しかし、前述したように、地域の方々が山林について詳しいこと、地域住民にとっては十分な遊び場であったことから、集落の方がかつての方法で山を活用したり、地域にいる子供たちが大人と一緒に自然と親しんだりできるような活動を進めていくことが一つ方針になるのではないかと考えている。地域外から訪れた観光客であっても、集落の方との長期的な関係を持つことで利用できるような、「自分だけが知っている山」といった形で特別感を持ってもらい、集落と関わっていくことも可能だろう。

もう一つ集落を象徴する農地資源がある。それは「真名畑あんずの里」と名付けられた、あんず畑である。地域活性化の一環として、10年ほど前から栽培が開始された。あんずを栽培するきっかけとなったのは、長野県の山奥の村で栽培している現場に視察に行ったこと。そもそも果樹で活性化という案が出ており、視察の結果、あんずは「花がきれい、実がおいしい、手間がかからない」といった良いこと尽くめであるというのを知り、植栽を実施。現在は5品種¹⁵、500本の木が植えられている。栽培に使われている土地は

¹⁵ 信州大実、新潟大実、山形3号、ニコニコット、サニーコットという品種



真名畑あんずの里

農家から借用し、活性化委員が管理・世話をしている。主な管理は、年に2回の施肥と数回の草刈りのみである。草刈りの頻度が少ないために、イノシシによる獣害が発生している状況にある。平成24年については、外部から専門家を招いて、肥料に関する指導を受け、施肥を行ったため、実がなったそうであるが、それまではほとんど実がなかったということである。やはり、現在の集落の高齢化や自給的な農業経営であることから、施肥や草刈り等に係る維持管理労力や費用が大きく、採算が合わないといったことから生産拡大は難しいという意見を集落の方は持っているようである。しかし、ジャムとしての製品化や化粧水にするなど、加工して販売することができないかと現在は検討している。

2. 歴史・文化

集落内や山林の中には歴史建造物も数多く残されている。「地域の歴史を知ること、理解することが集落で生きてきたことに誇りを持つきっかけになるのではないか」と考え、これまで集落の歴史について地域の方で、独自に勉強が進められてきた。

そもそも「真名畑」という地名の由来は、遣唐使派遣時代に金が採れる「そそめき金山」を拠点として、「漢氏と秦氏」古語で「マナ氏とハタ氏」が切り開いた村「真名畑」と考えられているようである¹⁶。ここではいくつか歴史物を地域の方が得てきた知識と共に紹介することとする。

・「祖々免金金山(そそめき金山)」

(南朝)延元4年(1339)結城文書「依上保は吉野殿の御領」より、先祖代々租税が免除された金山より命名された。佐竹候の南郷金山に比定される。¹⁷

50年も前は山のあちこちに金山坑道の跡地が存在していたが、現在までに林業の作業の邪魔となるため多くの入り口がふさがれている。現存している



^{16,17} 集落での勉強資料より引用

のは、案内して頂いた跡地のみ。中は、数十～数百 m の長さがあるという。坑道内は水路や水、コウモリといった非日常的な空間が存在しているという。近くには鉱毒を薄めるための貯水池が存在し、歴史に興味がある方には必見である。採掘した金は水路を用いて運搬され、岩手県の中尊寺金色堂の建設などに使われたそうだ。

・堂平



曹洞宗の頼室光慶大和尚が金山で働く人々の教化のために文明元年(1469年)に常流寺を開山した。寺には不動明王と観音像が祀られていた。後に不動明王は棚倉町山本のお不動様に、観音像は棚倉町流の常隆寺へそれぞれ移されたと伝えられている。現在は、本流の八溝川と北沢が合流する、滝になっているところに中州に赤いとたん葺きのお不動様の木造小祠がひっそりと昔の栄華を感じさせずに佇んでいる。

・自然のトンネル

福島交通バスの真名畑最終の佐々草バス停の近くには、八溝川が岩の洞窟をくぐって流れている。本当に自然なのか、もしくは人が掘ったものなのかと詳細が未だわからないが、八溝川の流れのルーツを考えると人によって採掘されたようである。



このほかにも、数多くの歴史建造物やそれに関わる知識が集落には存在している。大々的に外部へこのような歴史情報を提供することは難しい。しかし、来ていただければ様々なお話を集落の方から聞けたり、案内したりしてもらえるため、一度でも来村したからこそ味わえる真名畑集落の魅力を知っていただけるような仕組み作りが必要になると考えている。また、集落では一度途絶えたものの、30～40程前に復活した集落行事があり、「むじなっばたき」と呼ばれる。来年の豊作祈願を行う行事で、集落の子供たちが「むじな」と呼ばれる藁で作った棒で、歌を歌いながら地面をたたき、集落内のお宅をす

十月十日のむじなっばたき
大麦小麦よくあたれ
三角畑にそばあたれ
おまけに

べて回る。つまり、「むじな」＋「はたく」が「むじなっばたき」になったのである。行事の歴史について詳細な情報は得られなかったが、ほかの地区でも昔は行われていたものの、現在行われているのは真名畑集落のみであり、旧暦10月10日に行われている。また、それぞれのお宅でお小遣いをもらうことができ、地域のスポーツ少年団の活動資金に充てたり、子供たちは旅行に行ったりすることができる、とても楽しみにしている行事である。参加人数は小学生までの子供約10人とその親たち。お年寄りと子供が交流できる数少ない重要な行事の一つとなっている。



「むじなっばたき」の様子

3. 生活・食

本事業の他の事例での食への着眼や「一村一品」にみられるように、各地域において独自の食文化が根付いており、それらを活用している地域はたくさんある。しかし実際のところ、集落の方にとっては「当たり前」のことであり、それが集落活性化に活かすことができるかと認識していない。しかし、外から来た人にとって、普段食べないような山間部での食に大いに魅力を感じる。この「当たり前」と「非日常」のギャップは活性化に十分活かせると考え、地域の食文化に触れる機会を設けた。また、この真名畑集落では、林業により生計を立てていたことで、農業は自給的であるという背景から、それぞれの農家が家で栽培しているものは異なり、裏庭にも柿や柚子の木があるなど、実際のところ非常にバラエティに富んでいた。

お母さん方とけんちん汁を一緒に作っている際にも、「今はこんな風に若い子たちに料理に合った切り方とか教える機会がなくなったねえ。」といった声も聞かれた。このように、料理を通じた様々な交流方法が各地で求められているのではないだろうか。女性方は、体操教室や琴教室等積極的に地域内交流を生むための活動を行っており、さらにより多くの方との交流を図り、教育熱心である地域の精神を「食」という中で発揮できるのではないだろうか。

頂いた料理は以下のとおりである。



手作りこんにゃく生玉合わせ



やき餅



わさび葉漬け



さといもフライ



マコモダケの炒め物



大根の柚子巻き



半熟似卵



カブの甘梅つゆ漬け



ゴーヤの佃煮



切り干し大根の炒め煮



大根葉の炒め物



フキとタケノコの油炒め



ゼンマイの油炒めとひたし豆



キュウリの漬け物



かぼちゃ煮

このように、普段目にしないような食材を使ったものから調理方法まで様々あり、各家庭での味付け等も多種多様である。このような地域に根付く食文化は、各集落でレシピにされている例も多い。真名畑集落においても、作り方や作っているお母さんたち、さらには地域の文化や歴史などが分かり、より親しみやすいようなレシピブックを作成することも一つの活性化案として考えている。しかし、ただ作るだけではなく、そこから交流が生まれるような試食会や販売会を実施してもいいのではないかと考えている。

ここまで、【自然】【歴史・文化】【生活】に分けて「地域の魅力」を紹介してきた。それぞれに活かせる点、今後克服していかなければいけない点がある。それをまとめたものが下のようになる。資源がそれぞれにもつ魅力を最大限に活かし、かつ課題点も魅力として捉えることのできるような活動の方向性を見出していくことが今後必要になるだろう。

資源	魅力	課題・問題
自然	美しい里地里山景観 立派なスギ林地帯	林道であったり、落石もあつたり 気軽に入り込めない
歴史・文化	集落に関する知識が豊富 集落内の重要なアイデンティティ	歴史建造物は山の中にあり、人の目に触れる機会はほとんどない
生活(食)	田舎の味を味わえる 集落の知識が自分の知識にもなる	周知方法の模索

V. 集落活性化活動案の提案

様々な調査を行ってきた結果をこれまで提示してきたが、一点見えてきたことがある。それは、アンケート結果と集落の方とのディスカッションや集落資源探索を比較してみると、アンケート結果では見えてこない集落の方々の「本音」部分が、集落の方が実際に取り組んでみたいことや挑戦してみたいことであることがわかった。今後も、様々な場面でアンケートを用いて意識把握等を行う場面が出てくるが、必ずアンケートと聞き取り調査の両方を行うことで、結果間での整合性、もしくは不一致を検討することで集落の意識や考え方を理解することが重要である。

真名畑集落では、アンケート実施を行った際に、教育熱心である地域の特徴が裏目に出てしまった可能性があり、集落の将来像や自分の目標よりも、一般社会の現状問題を認識しており、現在の生活に対する不満や問題点の方が露わになってしまったと考えられる。一方、ディスカッションの場では、多くの方から実現してみたい目標を、集落の方々の間で共有することができた。

また集落の「強み」と「弱み」を簡単にまとめると次のように集約された。



このような、アンケート結果とディスカッション内容でのギャップも考慮し、活動案を提案したい。

活動案① 食の発信

活動内容	真名畑の米と、白米にピッタリのおかずを使った食文化の発信 活動主体は各家庭のお母さん方 〈提供方法〉 ① 提供型：道の駅や空き家利用カフェでの販売形式 ② 参加型：食手作り体験として、年間を通じて年に数回など、定期的に開催するイベント形式		
活動場所 提供場所 販売場所	候補	利点	課題
	公民館	すぐにでも利用できる インフラが整備されている	田舎感が感じられにくい 案内が難しい
	空き家	カフェ・田舎感が出せる	確保と整備、それに係る資金の確保 案内が難しい
	道の駅	たくさんの方が来てくれる 宣伝効果が生まれる	月数回といった形で、定期的な実施が必要となる
必要なモノ	食材：米 おかず（各家庭の味）		
対象	観光客(時間のあるお年寄り)→道の駅で広報活動が行えるのでは？		
そのほか	準備にお金が必要となるならば、事前に周知しておいたほうが集客は見込める。そういったことから、「前売り券」のような形式で事前販売するなどの方法を検討していくことが必要となる。		

<提案理由>

大きな理由としては2つ挙げられる。一つは、『既存資源であり、短期間で実行に移すことが可能であること』である。提供・販売先を確保し、お母さん方に負担がかからないようなスケジュールを組むことで活動はスムーズに進むと考えられるためである。もう一つは『料理について語るお母さん方は笑顔であり、そこには知識や工夫も豊富に詰まっているということ』である。今後課題となるのは、どのような形式・媒体で周知を行うのか、また、町内なのか、より広い範囲を対象とするのかといったことが検討事項として挙げられる。現段階で、レシピは集落の方に作っていただいております、写真や調理風景、お母さん方からのコメント等も入れ込み、道の駅などで配布できるような形にしていきたい。

活動案② 里地里山再生案

活動内容	最初に示したように、地域内で増加する休耕地を活用して、地域外住民を呼び込み、蕎麦の実や稲作を期別で作業に来てもらい、長期的に農地を利用していくことが目標。 また、最終的には交流人口の増加にも繋げたい。	
必要なモノ	必要なモノ	課題
	農地	①農地を貸していただける方を探す。 ②育てる品目や、利用する農地の規模などを話し合い、決定する。 ③既存組織を活用するなどして、外部からの受け入れ態勢を整える。
	ヒト	作業指導してくれる方や、外部から来てくれた方の世話人、普段の農地管理やトラブル対処の体制を整えることが必要。
対象	まずは、我々大学生が参加することで、年間を通して、活動の課題を探ってみる。	
そのほか	農地の確保から始まり、1年を通しての作業スケジュールや、何か問題があった時の対処法などを考えなくてはならないため、長期的な活動として捉える必要がある。	

<提案理由>

最も大きな理由としては、既に集落の方が自ら実行に移しているということである。現状では、農地はそば用(15a)、米用(17a)、大豆用(10a)と、集落の一部の方に農地を提供して頂いている。来年度からすでに種をまいてみようとして積極的に活動を行っており、それに共感して活動に少しでも協力したいという方たちも増えている。それに対して、大学生の方では、田植えや種まき、収穫を手伝ってくれるような参加者を募っていくことや、平常時の農地管理等の体制も整えなければならない。

VI. おわりに

以上、真名畑集落の実態や魅力、課題や活性化案の提案などを行ってきた。真名畑区は地理的には非常に人目につきにくい山奥に位置している。しかし、その地理的条件から生まれてきた自然資源に富んだ土地、自給的な農家の独自の食文化、そして教育熱心であり、自主性が備わっているという地域の特徴がある。一方で、地域の方々は社会情勢を的確に理解している分、集落存続に向けての問題や課題についてはこれまでも議論されていたものの、「やらなければならない」という責任感や負担が大きいのしかかっており、なかなか活動への一歩が踏み出せなかったのではないだろうか。しかし、集落の方々には夢があり、それを実現してもらうために、我々大学生が少しでも力になれば幸いである。真名畑集落の方は、自主性と実行力が高く、現在中心となって活動している方々の姿をみて、少しでも多くの集落の方々が活動に興味を持ってもらい、参加してもらいたい。そのためにも、若い人材を集落に投入し、その活動原動力の一助にしていきたい。地域密着 Lab としても、活動を外部に報告し、外部の方にも興味を持っていただけるような仕組みを整えていくことが課題であるだろう。

最後に、一つ言わせて頂きたいことがある。それは、このように農村での生活が難しくなっている今だからこそ、楽しみを見出し、その中からヒントを見つけ出すことが重要であるのではないだろうか。我々は、「60%の全力 120%の楽しみ」という意識のもとで、活性化に向けて活動を進めていこうと考えている。本事業年度は集落実態調査として報告したが、将来に向けて、楽しい里地里山を実現するためにも今後集落の方と、希望を持って活動していきたい。

謝辞

本事業年度において、集落代表の石井様ならびに区長さんや集落の方々、埴町役場および福島県地域振興課の職員の皆様には、多くの場面でご協力を頂き、調査や報告書の作成にたどり着くことができました。この場を借りてお礼申し上げます。